

Daily Mail

2026年3月20日（金）午後12時9°C

午後3時 10°C

広告 **CIAは、癌の潜在的な治療法に関する秘密文書が60年ぶりに機密解除されたことで、激しい反発に直面している。**

新たに公開されたCIAの文書によると、米国の情報機関は60年以上前に、**がん治療の可能性を示唆する研究を検討していたことが示唆されている。**

1951年2月に作成され、2014年に機密解除されたこの文書は、寄生虫と癌性腫瘍の驚くべき類似点を検証したソ連の科学論文を要約したものである。

報告書によると、研究者たちは、これら2つの生物がほぼ同じ代謝条件下で繁殖し、貯蔵エネルギーの一種であるグリコーゲンを大量に蓄積していたと考えている。

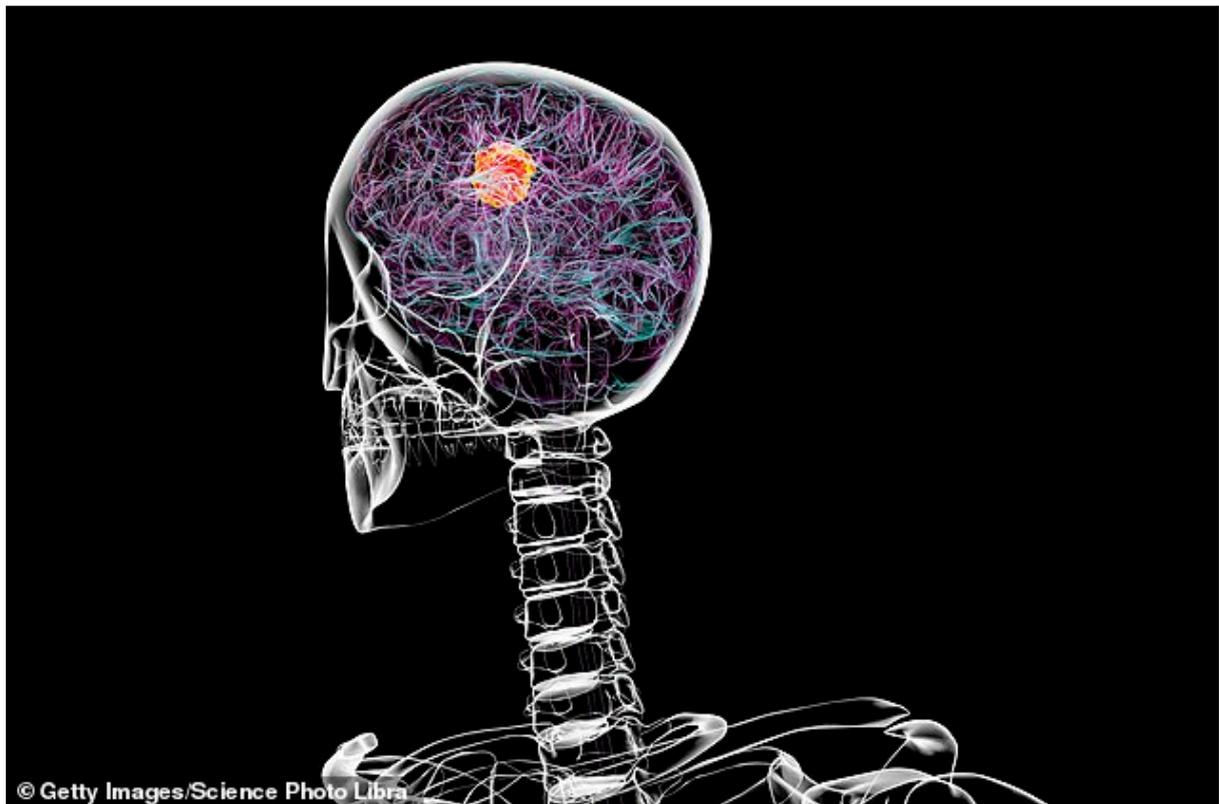
現在、動画プレーヤーで広告が再生されています。
この研究では、特定の化学物質が寄生虫感染症と悪性腫瘍の両方を標的にできることを示す実験結果も明らかにされた。

ミラシルDという薬剤は、住血吸虫症の寄生虫だけでなく、癌性腫瘍にも効果があると報告されており、寄生虫治療薬が腫瘍にも有効である可能性を示唆している。

他の化合物は、がん細胞の制御不能な増殖に不可欠な過程である核酸の生成を阻害することが判明した。

マウスを使った実験では、腫瘍組織が正常組織とは異なる反応を特定の化学物質に対して示すことが明らかになり、寄生虫と癌の間には生化学的な重複があるという認識をさらに裏付ける結果となった。

この文書は**10年以上前に機密解除**されていたにもかかわらず、最近になってインターネット上で再び公開され、一部のアメリカ人の間で怒りを引き起こしている。彼らは、冷戦時代の研究でがん治療の可能性を示唆する内容が、なぜ何十年も諜報機関のアーカイブに眠っていたのかという、憂慮すべき疑問を投げかけていると主張している。



+3

[ギャラリーを見る](#)

1951年2月に作成され、2014年に機密解除されたこの文書は、寄生虫と癌性腫瘍の驚くべき類

「アメリカ側は知っていた。彼らはそれを読んで、機密扱いにして、60年間金庫に保管した」と、ある人物がXで共有し、その投稿にはCIAの文書も含まれていた。

別のXユーザーは「CIAは1951年から癌が寄生虫によるものだと知っていた」と述べた。

しかし、その文書自体には、癌が寄生虫によって引き起こされるとは書かれておらず、ソ連の研究で腫瘍と寄生虫の間に生化学的な類似点が指摘され、実験でいくつかの化合物が両方に影響を与えることが観察されたとだけ書かれている。

デイリー・メールはCIAにコメントを求めた。

CIAの文書は1950年にソ連の科学雑誌『プリロダ』に掲載された論文。著者は、宿主の体内に生息する生物である内部寄生虫の生化学的挙動を研究していたVVアルパトフ教授である。

アメリカの情報分析官たちは、冷戦初期において、この論文が生物医学研究や国防研究に潜在的に関連性があると考えられたため、翻訳して配布した。

報告書にまとめられたソ連の研究によると、寄生虫と癌細胞の最も顕著な類似点の1つは、その代謝であった。

人間の腸に生息する寄生虫は、嫌気性代謝に大きく依存しており、つまり、酸素を使わずにエネルギーを生成する。大量の酸素を必要とする。



CLASSIFICATION ~~CONFIDENTIAL~~ **CONFIDENTIAL**

CENTRAL INTELLIGENCE AGENCY REPORT 50X1-HUM
 INFORMATION FROM CD NO.
 FOREIGN DOCUMENTS OR RADIO BROADCASTS

COUNTRY USSR DATE OF INFORMATION 1950

SUBJECT Scientific - Medicine DATE DIST. 26 Feb 1951

HOW PUBLISHED Monthly periodical

WHERE PUBLISHED Leningrad NO. OF PAGES 2

DATE PUBLISHED Oct 1950

LANGUAGE Russian SUPPLEMENT TO REPORT 50X1-HUM

THIS DOCUMENT CONTAINS INFORMATION AFFECTING THE NATIONAL DEFENSE OF THE UNITED STATES WITHIN THE MEANING OF EXECUTIVE ACT NO. 11650, AS AMENDED. ITS TRANSMISSION OR THE REVELATION OF ITS CONTENTS TO ANY PERSON BY AN UNAUTHORIZED PERSON IS PROHIBITED BY LAW. REPRODUCTION OF THIS PAGE IS PROHIBITED.

THIS IS UNEVALUATED INFORMATION

SOURCE Priroda, Vol XXXIX, No 10, pp 22-27.

BIOCHEMICAL RESEMBLANCE BETWEEN ENDOPARASITES
 AND MALIGNANT TUMORS

Prof. V. V. Alpatov

Endoparasites and malignant tumors resemble each other in many respects by reason of similar conditions under which they grow and exist. This suggested long ago the idea in regard to the parasitic nature of tumors.

Parasitic worms which live in the intestines exhibit a pronounced anaerobic metabolism (1). They deposit in their bodies large quantities of glycogen. The accumulation of glycogen is one of the properties which they share with tumors. The tissues of both intestinal parasitic worms and cancer tumors belong to the amphibiotic euryoxybiotical-aerofermentor type (Th. Brand's terminology), i.e., they are characterized by a metabolism involving incomplete oxidations under aerobic conditions and are at the same time adapted to anaerobic conditions (2).

In 1936, E. Mauns synthesized the alkylated aminoxanthone Myracyl D, which was found to be effective both against Bilharzia and malignant tumors (3). The guanine analog Guanozole (5-amino-7-hydroxy-1 - γ - triazole \overline{d} pyrimidine) synthesized by G. Kidder (4) suppresses the synthesis of nucleic acids (or, to be more precise, purine derivatives) in infusoria which are unable to convert adenine into guanine as well as in malignant tumors of mice. It is interesting that Guanozole is an optically active compound having dextrarotatory activity.

In investigating the relative toxic effect of atabrin enantiomorphs on various animals, the author of this article, together with O. K. Nastukova (2) found that the majority of animals are more sensitive to levorotatory atabrin. However, the following test objects proved to be more sensitive to dextrarotatory atabrin: Erlich's adenocarcinoma (a gland cancer of mice), species of mollusks the body of which is turned in a left-handed spiral, and nematodes which live as parasites in the intestine of frogs. Thus, tissues of malignant tumors and parasitic worms are distinguished from healthy tissue and from that of non-parasitic worms by an opposite reaction to optical enantiomorphs of atabrin.

- 1 -

CONFIDENTIAL

CLASSIFICATION		CONFIDENTIAL		DISTRIBUTION			
STATE	<input checked="" type="checkbox"/> NAVY	<input checked="" type="checkbox"/> NSRD					
ARMY	<input checked="" type="checkbox"/> AIR	<input checked="" type="checkbox"/> FBI					

© CIA

Sanitized Copy Approved for Release 2011/09/14 : CIA-RDP80-00809A000600380033-3

+3

ギャラリーを見る

この研究では、特定の化学物質が寄生虫感染症と悪性腫瘍の両方を標的にできることを示す実験結果も明らかにされた。ミラシルDという薬剤は、住血吸虫症の寄生虫だけでなく、癌性腫瘍にも効果があると報告されている。

腫瘍細胞も同様の挙動を示すようで、体内の酸素不足の環境下でも生存できるよう、代謝経路を変化させていることが多い。

寄生虫と腫瘍の両方において、細胞がエネルギー貯蔵として利用する分子であるグリコーゲンが大量に蓄積されることも観察された。

この蓄積は、両方のタイプの組織が、健康な細胞と比較して、通常とは異なる代謝条件下で機能している可能性を示唆している。

研究者たちはこれらの組織を「エアロファーマンター」代謝型に分類した。これはドイツの科学者Th. Brandが用いた用語で、酸素が少ないときでもエネルギーを生成でき、酸素のない環境でも生存できる

この二重の代謝能力は、血液供給が限られている密集した組織内で腫瘍が生存するのに役立つ可能性がある。

ソ連の科学者たちは、寄生虫と腫瘍に同様の影響を与えると思われる実験薬についても指摘した。

CIAの文書で挙げられた例の一つは、ドイツの化学者H・マウスが1938年に合成した化合物、ミラシルDである。

この薬は、すでに住血吸虫症（血液吸虫によって引き起こされる寄生虫疾患）に対して有効性を示していた。ソ連の研究によると、悪性腫瘍に対しても効果があることが示された。

報告書で取り上げられたもう一つの化合物は、グアニンに似た分子であるグアノゾロであった。それは、DNAとRNAの化学的構成要素である核酸の生成を阻害する。

CONFIDENTIAL

CONFIDENTIAL

50X1-HUM

There are reasons to believe that the specific biological characteristics of malignant tumor tissue and parasites comprise the following elements: (1) presence of specific antigens in both malignant tissue and parasites; (2) optical inversion of the receptors of certain optically active compounds such as atabrin; and (3) peculiarities of purine metabolism in malignant tissue which are connected with the synthesis of nucleic acids, and subsequently, of nucleoproteins that are important constituents of cell nuclei. One may assume that malignancy is closely connected with alterations of the chemical properties of protoplasm, specific properties of enzymes, and possibly peculiarities of the protein carriers of enzymes.

Under the circumstances, recent work on proteins of malignant tumors which is being carried out in the USSR (5, 6, 7) assumes particular importance.

BIBLIOGRAPHY

1. V. V. Alpatov and O. K. Nastukova, DAN SSSR, Vol LIX, No 6, 1948.
2. V. V. Alpatov and O. K. Nastukova, Byulleten' Moskovskogo Obshchestva Ispytaniya Prirody, No 6, 1947.
3. O. Hackmann, R. Goennert, and H. Mauss, Naturwissenschaften, No 1, 29, 1949.
4. G. Kidder, et al, Nature, Vol CIX, p 511, 20/10/49, 1949
5. B. I. Zbarskiy, Vrachebnoye Delo, No 2-3, 1947.
6. I. B. Zbarskiy, Uspekhi Sovremennoy Biologii, Vol XIII, 219, 1946.
7. V. Orekhovich, Biokhimiya, No 5, 1940

- E N D -

- 2 -

CONFIDENTIAL

CONFIDENTIAL**+3**

ギャラリーを見る

この文書は10年以上前に機密解除されたものの、最近になって再びインターネット上に現れ、一部のアメリカ人の間で怒りを引き起こしている。彼らは、がん治療の可能性を示唆する冷戦時代の研究がなぜ何十年も諜報機関のアーカイブに眠っていたのかという、憂慮すべき疑問を投げかけていると主張している。

実験室での試験では、この物質は特定の微生物だけでなく、マウスに移植した癌腫瘍においても核酸合成を抑制することが確認された。

がん細胞は制御不能な分裂のために急速なDNA複製を必要とするため、このプロセスを阻害することで腫瘍の増殖を遅らせることができる。

この研究では、腫瘍や寄生虫がアテブリンと呼ばれる化学物質にどのように反応するかについても調べた。アテブリンには、鏡像異性体と呼ばれる2つの形態が存在する。

研究対象となったほとんどの動物では、この化合物の左回転型の方が毒性が強いことが判明した。しかし、マウスの腫瘍組織や、左巻きの特定の軟体動物では、貝殻やカエルの体内に寄生する虫は、右回転型に対してより敏感であった。

この異常な反応は、腫瘍細胞や寄生虫が化学的に逆転した受容体を持っている可能性を示唆しており、つまり、それらの分子構造が正常組織とは異なる形で薬剤と相互作用することを意味する。

これらの発見に基づき、ソ連の研究者たちは、腫瘍と寄生虫が共有する可能性のあるいくつかの生物学的特徴を提唱した。

これらには、特異な抗原の存在、核酸生成に関わる異常なプリン代謝、および細胞原形質内の酵素系の変化などが含まれる。

科学者たちは、悪性腫瘍は細胞の内部環境における化学的变化、特に酵素やそれらを運ぶタンパク質。

CIAの文書は、当時、ソ連が行っていた腫瘍タンパク質と癌細胞の化学に関する継続的な研究が特に重要視されていたと指摘して締めくくっている。

冷戦初期、アメリカの情報機関はソ連の医学と生物学における進歩を綿密に監視していた。それは、これらの画期的な成果が公衆衛生と潜在的な生物兵器研究の両方に影響を与える可能性があるかと懸念していたためである。

現代の癌科学では、腫瘍を文字通りの意味で寄生虫として扱うことはないものの、代謝異常や免疫回避など、腫瘍生物学の多くの側面は、今日でも活発な研究分野であり続けている。

機密解除された報告書は、科学の貴重な一端を垣間見せてくれる。20世紀半ば、研究者たちが癌の根本的な性質を解明しようと奮闘し、いつの日か効果的な治療法につながる手がかりを探し求めていた頃、鉄のカーテンの向こう側で探求されていたアイデア。